

石牟礼道子の胸に終生刻み込まれた
若き女郎の血染めの物語でございます

独演 椿の海の記 第三章・第四章より

じゅうろくじょう

原作 石牟礼 道子

出演・構成・演出 井上 弘久

作曲（不知火海のテーマ）金子 忍



〈第一部〉
作品紹介 - 石牟礼道子と
『椿の海の記』をめぐって - (20分)
〈第二部〉
カリンバの弾き語りによる
独演『十六女郎』(85分)

〈鴨川公演〉

2025年2月22日(土)

13:30 OPEN / 14:00 START

【チケット】3,000円

会場：大山千枚田棚田倶楽部 千葉県鴨川市平塚 540

4歳の自分＝みっちんを主人公にした石牟礼道子の自伝的小説(全十一章)。
4歳という、通常は言語化されることのない時期の、自らの自意識の目覚めを描ききって、
世界文学的にも他に類のない奇跡の書。水俣病患者たちに生涯寄り添い続けた
「石牟礼道子という魂のすべてが語られている」(渡辺京二氏)と言われる傑作である。



田中優子 Tanaka Yuko
江戸文学・江戸文化研究者・法政大学名誉教授

江戸文学・江戸文化研究者で、エッセイスト。法政大学第19代総長。現在は同大学名誉教授。2020年に「苦海・浄土・日本―石牟礼道子もだえ神の精神―」を刊行。女性ならではの石牟礼道子論は説得力に富み、危機的状況を生き抜くための希望を石牟礼道子の著作から導きます。

「十六女郎」は、私が井上弘久さんの『椿の海の記』独演を初めて聞いた時の作品だ。その時の衝撃は忘れられない。そのころ井上さんはこの章を「ぼんた無情」という題名で語っていたらして、水俣市栄町の女郎ぼんたが殺害され、その解剖に道子の父の亀太郎が立ち会う顛末が実にドラマティックだった。一人一人が目の前で生きて語っている。読んだ時の印象と異なる演劇的立体的構成に驚いた。私はそれから、可能な限り井上さんの独演を聞いている。

「十六女郎」は『椿の海の記』の他の章と異なる。『椿の海の記』の全体は道子が幼かった頃の、水俣の自然や生活を中心にした作品である。しかし「十六女郎」はそれらとは違って、町の中の間模様を極めて面白い。栄町という生活の場が生々しいのだ。とりわけ井上さんの独演は、第三章の往還道を前半に置き、その後第四章「十六女郎」の途中からつなげているので、栄町の様子が目に見えるようだ。往還道は、後に水俣病に侵される漁師町の女性たちが魚を売りに来るシーンが実に力強く、当時の町の生き生きとした様子が伝わってくる章なのである。

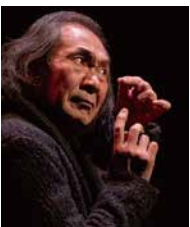
町の賑わいの後、道子は蓮の畑に行く。そこで蓮の蕾を発見する。道子は家に帰ると盲目の祖母の手をとってその形を伝える。祖母の髪を結びあげ、ぺんぺん草をそこに刺して二人でその音を聞く。「この世の無常の音のする」と祖母は言う。その寂滅の世界から、「末広」という女郎屋が立ち現れ、そこに血の滴る畳と、十六歳のぼんたの死骸が運ばれてくる。

その後は緊迫の展開だ。そしてただ一人解剖に立ち会った亀太郎の慟哭は私たちに、「女郎」とは何であったかを、心の震えとともに、余す所なく伝える。家族のために身を捨て、天草から売られてきた少女が、解剖してみると見たこともないほど美しい肺を持っているというくだりはその健康と若さが女郎であることによって破壊されていく、そのことを私たちに突きつけるのだ。

人はなぜ、その持つて生まれた心身の健康を侵されるのか？ 娼婦という存在、つまり女であることによっておとしめられる残酷さと、近代工業がもたらした水俣病に侵される、漁師たちにもたらされた残酷さ。亀太郎の慟哭は、その両方を心の深いところに刻みつける。

十六女郎 ―慟哭する亀太郎―

田中優子(江戸文学・江戸文化研究者)



井上弘久 Inoue Hirohisa / 俳優・演出家

1952年、東京生まれ。1979年より劇団転形劇場(太田省吾・主宰)に所属。名作「水の駅」「小町風伝」などで、日本および海外各地の舞台を踏む。1990年より劇団U・フィールドを主宰。構成・演出をつとめる。同劇団解散後、2013年より文学作品を一人で舞台化する「朗読演劇」を開始。チャールズ・ブコウスキーの「町でいちばんの美女」カフカの「変身」で好評を得る。2018年より石牟礼道子「椿の海の記」全十一章の連続上演を開始。三年をかけて全十一章の上演を果たして後、現在その全国行脚公演を遂行中。

撮影：スズキマサミ

チケット申し込み・問い合わせ先

大山千枚田保存会 千葉県鴨川市平塚 540

〈チケット〉3,000円(下記公式サイトにても予約受付中) TEL 04-7099-9050

「独演 椿の海の記～もうひとつのこの世をもとめて～」公式サイト

<https://www.tsubaki-dokuen.com>



公式サイトはこちら▲

全国行脚公演2024 独演「椿の海の記」相模原/柏崎/柏/大和/北九州/水俣/東京(神保町/調布)/熊本/神戸/鴨川/藤沢